

グウェンフランとは誰だったのか（2） — 『バルザス＝ブレイス』の冒頭の歌をめぐる —

梁 川 英 俊

Ⅲ. 待望されるグウェンフラン

グウェンフラン事件

七月王政下のフランスで、1832年から1840年まで公教育大臣を務めたのは、フランソワ・ギゾー (François Guizot) であった。歴史学者で、ソルボンヌ大学で歴史学を講じていた彼は、歴史こそが国家の柱であるという考えから、1830年に内務大臣に就任すると、過去の保存を目的に国内の歴史的建造物の保護に乗り出し、その推進役として歴史的建造物視学長官のポストを設けた。その後、公教育大臣に就任すると、1833年に歴史的資料の集成を目的とした一大国家プロジェクトを立ち上げて、公教育省のなかに科学、哲学、文学美術に関連する資料や草稿の発見を任務とする委員会を発足させた。

このギゾーによって1834年に歴史的建造物視学長官に任ぜられたのが作家のプロスペル・メリメであった。メリメは1835年にギゾーから命を受けて、フランス西部地方に赴いたが、その使命にはランデヴェネック大修道院が所有していた写本類の発見も含まれていた。ところが、この旅行はおそらくメリメが予想もしていなかった展開を見せる。始まりは1835年10月15日のナントの新聞『エルミーヌ』 (*L'Herminette*) に掲載された、次のような記事だった。

古文書学校の学生で、同名の代議士の息子であるドラヴィル＝マルケ氏 (M. Delaville-Marqué) は、モルレー近郊のモンターニュ・ノワールの教会で、古のバルド、グウェンフラン (Quin-Clan) の詩を発見した。この詩は、古い文学的記念碑の愛好家たちに発見が待望されていたもので、これまでその断片しか知られていなかった。バス＝ブルターニュ語で書かれたこの詩は5世紀か6世紀のものである。『騎士年代記』 (*Les Chroniques chevaleresques*) の本物のメルランではないにしても、グウェンフラン (Quin-Clan) はブルトン人のメルランであった¹。

同じ記事は10月28日のパリの新聞『クーリエ・フランセ』 (*Le Courrier Français*) に、翌日には『ジュルナル・デ・デバ』 (*Journal des débats*) をはじめロンドンやベルギーの新聞にも掲載される。もちろん、この記事自体には何ら問題はなかった。問題はその続報にあった。というのも、この記事を最初に掲載したナントの新聞『エルミーヌ』は、10月30日に、その発見されたばかりの「バス＝ブルター

¹ Cité par Robert Leclercq, « Une lettre de Théodore Hersart de La Villemarqué : Prosper Mérimée victime d'un canular le « manuscrit » de Guinclan », *Société archéologique du Finistère*, 1994, p. 294.

ニュ語で書かれたわれわれの有名なバルドの写本²」が、今度はメリメによって横取りされたと報じたからである。メリメはラ・ヴィルマルケが写本の写しをとる許可を得るためにカンペール司教のところへ向かう途中に、それを奪い取った、と記事は語っていた。

俗に「グウェンフラン事件」と呼ばれるこの出来事は、当事者の双方、とくにラ・ヴィルマルケが事件についてほとんど語らなかったために、多くの憶測を呼んだ。たとえば、グルヴィルは徹頭徹尾この事件を、ラ・ヴィルマルケが『バルザス＝ブレイス』の前宣伝のために行った自作自演のペテンであると解釈した³。

しかし、1990年代に発見されたラ・ヴィルマルケの手紙は、彼自身がこの事件にまったく関与していなかったことを教えてくれる。その手紙は、『万国同時代人辞典』(*Dictionnaire universel des contemporains*)の著者ギュスターヴ・ヴァプロー(Gustave Vapereau)がラ・ヴィルマルケに送った手紙に対する返信であった。ヴァプローはそこで、ゴシップ作家ウジェーヌ・ド・ミルクール(Eugène de Mircourt)が刊行した『同時代人』(*Les contemporains*)にある以下の記述の真偽について尋ねていた。

彼(メリメ)は6世紀のブルターニュのバルドであるグウェンフラン(Guin-Clov)の詩について、素晴らしい博識でいまひとつの作品を出版した。ただ、彼はこの詩の発見を、真のクリストファー・コロンプスであるド・ラ・ヴィルマルケ氏の抗議にもかかわらず、自分の功績にするという誤りを犯したのである⁴。

ラ・ヴィルマルケは1879年3月25日付で、ヴァプローの質問にこう答えている。

あなたが私に伝えてくださったミルクールの文章は言語道断なもので、この種のことに取り合う必要はないとおっしゃるのは賢明なことです。メリメはこの件について一度も私に話しませんでした。彼と同様、私も軽蔑をもって答えたことでしょう。想像上の発見に対して自分がした覚えもない抗議をしたという人に、他にどのように答えたらいいのでしょうか？そして「出版された驚くべき博識の作品」に関して言えば、誰も一冊たりとも見た人はいないのです。なぜなら、それは存在しないのですから！メリメはブルターニュの民衆詩に関してきちんとした報告書を書きました。その後その本はアカデミー・フランセーズから賞を受けましたが、私の知る限り、そこにはバルド・グウェンフラン(Guinclan)の詩に関する記述は一行もないはず⁵。

つまり、実際には写本の発見も詐取もなかった。事件は当事者の双方にとってまったく身に覚えのないことであり、それが起こったのはただ新聞紙上のみだったのである。では、なぜこのような「事件」が起きたのか。

² *Ibid.*, p. 476.

³ F. Gourvil, *Théodore-Claude-Henri Hersart de La Villemarqué (1815-1895) et le « Barzaz-Breiz » (1839-1845-1867)*, Imprimerie Oberthur, 1960, pp. 37-46.

⁴ Cité par R. Leclercq, *op. cit.*, p. 473.

⁵ *Ibid.*, p. 474.

手紙を紹介したロベール・ルクレール (Robert Leclercq) は、おそらくメリメや七月王政を好ましく思わないブルターニュの知識人の誰かが、メディアに偽の情報を流したというのが真相だろうと推測する⁶。つまり、事件の背景にあったのは、中央と地方の政治的・宗教的な争いだったというわけである。

もっとも、いまは事件の真相は重要ではない。ここで注目すべきはむしろ、グウェンフランというガリアのバルドの写本の発見が、当時これほどのニュースバリューを持つ出来事だったということである。実際、この発見は学界の一部を活気づけた⁷。歴史家のジャン＝ジャック・アンペール (Jean-Jacques Ampère) は1836年に『両世界評論』 (*Revue des deux mondes*) に発表された「ガリア人と他のケルト諸民族におけるバルド」でこう語っている⁸。

われわれは昨年その歌が再発見されたとされたグウェンフラン (Guinklan) なる5世紀か6世紀のアルモリカのバルドの実在の可能性を認めることができる。

その詩がランデヴェネック大修道院に保管されていたということは大いにあり得ることだ。ちょうどウェールズに、タリエシヤスラワルフ (Llywarch) やメルランや他の同時代のウェールズのバルドたちの詩が保管されているように。もし存在するのなら、そのグウェンフラン (Guinklan) の草稿が、もちろんブルトン人の愛国心によって公刊され、われらのブルターニュがそのバルドを持つことを期待しよう⁹。

アンペールはこの論考で、古代の著作家たちの記述やウェールズ、スコットランド、アイルランドに残るバルドの遺産に触れ、「ローマの剣がガリアの古い森を伐採し、その古い詩歌を摘み取ってしまったのだ¹⁰」と嘆き、「元来古代のバルドの主要な居場所¹¹」であったガリアの地で花開いたはずのバルドたちの失われた詩歌に思いを馳せる。他の地域では残り得たその作品が、元来バルドの

⁶ R. Leclercqは首謀者はケルダネではないかと推測しているが、その根拠のひとつとして、次のメリメの旅行記に見えるケルダネの態度を挙げる。確かに以下の記述からは、ケルダネがグウェンフランの草稿の探索に協力した様子はまったく窺えず、また自らメリメを案内することもなかったようだ。「ブルターニュではとくにこの数年、オシスミ族の昔のオピドゥムであるオシスモールの町の比定が盛んであった。ある者はそれがカンペールであると言い、他の者はプレストだのサン＝ポル＝ド＝レオンだのと言った。レスヴァン近郊における最近の大規模な基礎工事の発見によって、この最後の意見が勝ちを収めたようであるが、この仮説はミオルセック・ド・ケルダネ氏によって巧みに発展させられ、氏はまたこの古代の遺跡の存在の最初の確認者となった。その発見について情報を得ようとこの学者を訪ねたが、彼は自分で拾い集めたかなりの数の破片を快く見せてくれた。それらは浮彫で装飾された赤い陶器の欠片や、ガラスの断片、また同じ材質の完全な壺だったりした。他にも雑多な陶器、幾つかのブロンズ製の道具、また数個のメダルもあったが、大部分がローマ帝国末期のものであった。ド・ケルダネ氏の指示によって、私はレスヴァンから一里半のところにある高原に向かった。」 (Prosper Mérimée, *Notes d'un voyage dans l'ouest de la France*, Librairie de Fournier, 1836, p. 186-187.)

⁷ たとえば、*Société académique de Nantes et du département de la Loire-Inférieure*, 10^e vol, Impr. C. Mellinet, 1839, pp. 223-224には次のような記述がある。「最近のドルイドの音楽に関する草稿やバルド・グウェンフランの詩、そして他の幾つかの韻文作品の発見は、それらが永久に失われたと思われていただけに、私たち考古学者を目覚めさせ、その熱意を刺激し、その希望を活気づけた」。

⁸ アンペールは17歳のとき、同じリセにいたプロスペル・メリメと一緒に『オシアン』の翻訳を試みたという。1820年のことである。cf. Ora Avni, « Mystification de la lecture chez Mérimée : lira bien qui rira le dernier », *Littérature*, vol. 58, n° 58, 1985, p. 30.

⁹ Jean-Jacques Ampère, « Des bardes chez le Gaulois et chez les autres nations celtiques », *La Revue des Deux Mondes*, t.7, 1836, p. 442.

¹⁰ *Ibid.*, p. 419.

¹¹ *Ibid.*, p. 441.

本拠地であったガリアのどこかに眠っていないはずはない。5世紀のガリアのバルドの實在の証拠は、「大いにあり得ること」として、まさに待望されていたのである。

ラ・リュ神父の影響

こうしたフランスにおけるガリアのバルドに対する関心の火付け役となったのは、すでにその名を挙げたラ・リュ神父であった。その著作がグウェンフランの名をほぼ一世紀ぶりに蘇えらせたことはすでに指摘したが、彼が19世紀のフランスの学界に与えた影響はきわめて大きなものがあった。

ラ・リュ神父は1752年、ノルマンディーのカーンの生まれ。大革命までカーン大学のコレージュで教鞭をとったが、革命後に宣誓拒否僧となり、1792年にイングランドに渡った。亡命先の図書館で膨大な量のフランス中世の詩に出会った彼は、ルネサンス以来忘れられていたノルマン人の詩人たちの業績の最初の発見者となる。ラ・リュ神父はその作品の筆写を続ける一方で、王立考古学協会の会員として、同協会が発行する『アーキオロギア』(*Archaeologia*)に、ワース(Wace)やマリー・ド・フランス(Marie de France)に関する論文を発表した。この英仏両国民にとっての貴重な遺産の発掘は評判を呼んだ。神父は1797年に帰仏するが、1808年にカーン大学に歴史学講座のポストを得るまで、不安定な生活を強いられ、そのせいもあって、帰仏後に中世文学に関するまとまった論考を発表するのは、1815年の『中世におけるアルモリカのバルドの作品に関する研究』を俟たなければならなかった¹²。神父はこの論考をこう始める。

トルバドゥールが南フランスを心地よい歌で虜にし、トルヴェールの英雄物語が北フランスに騎士道精神とその美德を広めるよりもはるか以前に、王国の西方にはケルト人の言葉を話し、独特の詩歌を持った民族がいた。それは、数世紀来変わらぬ言語で記述されていた以上、おそらくはすぐれた詩歌であったに違いなく、しかもそれがフランス文学とガリア人の原始的な文学との幾つかの接点を与えてくれる以上、われわれにとってはこの上もなく貴重な詩歌である¹³。

この論考でラ・リュ神父は、いまはその痕跡すら残っていない古のガリアのバルドの作品がいかなるものであったかを知る手掛りとして、中世に「ブルターニュのレー(Lai)」あるいは「アルモリカのレー」と呼ばれたジャンルに注目する。これらのレーは元来ブレイス語で書かれていたとされるが、オリジナルはすでに失われており、いまでは英語訳やフランス語訳でしか読むことができない。13世紀に活躍したマリー・ド・フランスは、これらアルモリカのレーを数多くフランス語に翻訳し、英仏で人気を博した。記憶すべき出来事を韻文の形で残すのは、アルモリカの伝統だったのである。

ラ・リュ神父は言う。ブルターニュとウェールズはかつて言語と歴史を共有し、文学においても同じ話材やテーマを用いた。それゆえ、トルヴェールたちが話を始めるときには、これはウェール

¹² ラ・リュ神父は1811年に、Marie-Joseph Chénierの不完全なトルヴェール論への反論として*Journal de l'Empire*に3回に「ノルマン人の手紙」(*Lettres normandes*)を書き、一般読者にその知識の一端を披歴していた。

¹³ Gervais de La Rue, *Recherches sur les ouvrages des bardes de la Bretagne armoricaine dans le moyen âge*, Imprimerie de F. Poisson, 1815, p. 3.

ズから来た話だと前置きすることがあったし、逆にクレチアン・ド・トロワ (Chrétien de Troyes) の『獅子の騎士の物語』(*Roman du chevalier au Lion*) のように、アルモリカのバルドの詩歌に内容を汲むと作者が前置きした話が、6世紀のウェールズのバルドによって歌われていたものであることもあった。実際、クレチアンの物語の登場人物の多くはアルモリカ人であり、舞台もアルモリカかウェールズであった。

同じ詩人(クレチアン)は『湖のランスロー』(*Lancelot du Lac*)と『ウェールズ人ペルスヴァルまたの名を聖杯のペルスヴァル』(*Perceval le Gallois, alias du san-graal*)において、最初の作品ではシャンパーニュ伯夫人が、二つ目の作品ではフランドル伯フィリップが彼に題材を与えたと教える。(……)したがって、アルモリカ人かウェールズ人の主人公に起こる驚異の冒険譚であるこれらの物語は、当時の君主の後ろ盾によって、12世紀にブルターニュのレーをラテン語かフランス語散文に訳したものであった。クルリー公でトリニー公でもあるロベール・ド・カーン (Robert de Caen) は、『ブリット』(*Brut d'Angleterre*)を1138年にラテン語に訳させた¹⁴。それはオックスフォード副司教ゴートイエ・カレニウス (Gautier Calenius) が小ブリタニアから持ち帰ったものであった¹⁵。

ラ・リュ神父は、クレチアンの前口上や『列王史』の「序文と献辞」の記述をそのまま文字通りに受け取り、これらの書物の素材として当時広範囲に流布していたブルターニュ起源のレーの存在を想定する。では、ブレイス語で書かれていたその原本はどこに行ったのか。

ロベール・ド・ボロン (Robert de Borron)、リュック・デュ・ガスト (Luc du Gast)、ゴートイエ・マップ (Gautier Map) やその他のノルマン人ないしはアングロ=ノルマン人の作家も、「円卓」の幾つかの物語をラテン語からフランス語散文に訳したが、それはノルマンディー公ヘンリー2世の要請によるものであった。この散文訳がクレチアン・ド・トロワに渡され、彼はそれを韻文に直した。イギリスの学者の何人かが、ヨーロッパのどの図書館にもそのオリジナルがないことから、この翻訳の真实性に異議を唱えたが無駄であった。それがもともとバス=ブルターニュ語で書かれていたので、必要ときに参照できる翻訳がある以上、その作品をフランスの他の地域で使用されない言語で保存しようと思わなかったのは容易に理解できる¹⁶。

つまり、ブレイス語の原典が失われたのは、話者の少なさもさることながら、それ以前に物語が

¹⁴ この年号は1834年版では1125年になっている。cf. Gervais de La Rue, *Essais historiques sur les bardes, les jongleurs, et les trouvères normands et anglo-normands*, t.1, Chez Mancel, Librairie-éditeur de la Société des antiquaires de la Normandie, 1834, p. 29.

¹⁵ G. de La Rue, *Recherches sur les ouvrages des bardes de la Bretagne armoricaine dans le moyen âge*, pp. 17-18. この引用文にある「ブリット」(Brut) は、ウェールズ語で「王の年代記」を意味する。したがって *Brut d'Angleterre* は、そのまま訳せばジェフリーの書物と同じ「ブリタニア列王史」という訳になるので、本稿では「ブリット」とカタカナを当てた。アルファベットでの名前は書き手によってさまざまに異なるが、同一の書物を指すのが明白な場合は、すべて『ブリット』で統一する。ラ・ヴィルマルケをはじめ、円卓物語のブルターニュ起源を唱える多くの論者が言及する文献であるが、それがアルモリカ起源であるという説を初めて唱えたのは Thomas Warton であるという。彼の『英国詩の歴史』(*The History of English Poetry*, vol. 1, J. Dodsley, 1774) の63ページには“the old fabulous Armorican manuscript”と書かれている。cf. J-Y. Guioimar, « Le Barzaz-Breiz », in Pierre Nora, *Les Lieux de mémoire*, III/2, Gallimard, p.562.

¹⁶ G. de La Rue, *Recherches sur les ouvrages des bardes de la Bretagne armoricaine dans le moyen âge*, pp. 18-19.

他言語であまりにも広く普及しすぎたためなのである。さらに神父は、このレーの起源について次のように述べる。

かくして、ガリアのバルド、この民族の詩人にして礼賛者にして歴史家でもあるバルドたちは、中世のアルモリカの詩人のうちにその継承者を見出したのである。そして彼らの「レー」は間違いなく、ガリアのバルドたちの文学に属しているのである。なぜなら、それらは同じ言語によって書かれ、同じ意図の下に作られ、同じ楽器で歌われる、同じ種類の作品だからである¹⁷。

失われたガリアのバルドの作品は、ブルターニュのレーへと引き継がれ、さらにトルヴェールによって伝えられた。要するに、今日いかなる痕跡も残っていないかに見えるガリアのバルドの作品は、アーサー王伝説や円卓物語などのさまざまな物語に話材を提供しながら、現在まで脈々と継承されているのである。これがラ・リュ神父の主張だった。

論考の最後に、神父は想定される反論への答えとして、これらのレーが小ブルターニュのものであり、大ブルターニュ、すなわちブリテン島に由来するものではないこと、またブルターニュの書物を訳したというモンマスの発言が韜晦ではないこと、同じくブルターニュのレーを訳したと語るトルヴェールにも読者を偽る意図はないことを論証し、こう結ぶ。

人はこう言うかもしれない。トルヴェールに称賛されたアルモリカの原典は今日まったく見つからないが、そのような作品のうち何ひとつ残らなかったということは考えられない、と。私はこう答えよう。その点に関して、私はいかなる調査も行わなかったし、それら過去の文学的遺産が将来見つかる可能性がまったくないのか否かは分からない、と。しかし、だからといって、それが存在しなかったと結論することはできないのではないか。時代も国も異なる多くの作家が逆のことを主張しているのだから。(……) 新しい研究によって文学の領域におけるブルターニュの貢献を数え上げ、それを郷土の誇りとするのは、ブルターニュの文学者の仕事である¹⁸。

この論考は当時のブルターニュのサロンでかなりの評判を呼んだという。実際、このラ・リュ神父の呼びかけに答えるように、ブルターニュでは1820年代から貴族を中心に民謡の採集が始まる¹⁹。それらの貴族のなかには、エマール・ド・ブロワ (Aymar de Blois)、ジョゼフ＝フランソワ・ド・ケルガリウ (Joseph-François de Kergariou)、サン＝プリ夫人 (Madame de Saint-Prix) などがいたが、「ニゾンの貴婦人」と呼ばれたラ・ヴィルマルケの母親もその一人だった。

さて、1834年、19歳になったラ・ヴィルマルケは、故郷ブルターニュを後にしてパリに出る。同年12月12日、青年はラ・リュ神父に宛てて次のような手紙を書いている。

随分前から先生に手紙を差し上げたくてたまりませんでした。私は著作を通じて先生を存じ上げて

¹⁷ *Ibid.*, p. 32.

¹⁸ *Ibid.*, pp.67- 68.

¹⁹ Donatien Laurent, « La Villemarqué et les premières collectes en Bretagne » in *La Bretagne et la littérature orale en Europe*, Centre de recherche bretonne et celtique, 1999, pp. 155-156.

おりました。私はそれらの著作を読み、研究し、考え、諳んじ、手元がないときには書き写したりもしました。なぜなら私はブルトン人だからです。そう、先生が私たちの国の文学的栄光を燦然と輝かせて以来、ブルトン人は皆、私と同様に先生を称賛し、特別な敬意を抱いております。(……)

先生がかつて「文学の領域におけるブルターニュの貢献を数え上げ、それを郷土の誇りとするのは、ブルターニュの文学者の仕事である」とお書きになったとき、19年後にそれが現実になるとは考えておられなかったのではないのでしょうか。しかし私は現にいま『ブルターニュ文学、およびその初期フランス文学との関連についての研究』という著作に取り組んでいるのです²⁰。

この手紙への返信で、83歳の老人は「あなた方のアルモリカのバルドについて、しかもその作品について書くとは、われながら大それたことをしたものだと思う」と前置きした上で、助言らしい助言はできないが、その年に3巻本として刊行した『バルド、ジョンゲール、そしてトルヴェールに関する歴史的試論』(*Essais historiques sur les Bardes, les Jongleurs et les Trouvères*)の第2巻と第3巻を読めば、何か情報が得られるかもしれないと答えた。

ところで、この著作の第1巻には、1815年に刊行された『研究』が再録されていた。しかしそれはかなりの加筆修正が施された新版であった。修正点の多くは、ウェールズに関することであった。たとえば、すでに引いた初版の冒頭部分にあった「王国の西方にはケルト人の言葉を話し、独特の詩歌を持った民族がいた」という一文は、新版では次のように大幅に加筆されていた。

フランスの西方のアルモリカ人とイギリスの西方のウェールズ人というケルト人種の二つの民族が、中世において、その言語を、またそれによって古のバルドの文学をも保存したのである。われわれがすでに見たように、6世紀までにこのバルドたちの詩歌はわれわれの土地で光彩を放った。しかしその同じ頃、ガリアのミューズはアルモリカに避難し、島のブリトン人の入植者たちが彼らのバルドとともに来て定住して、ケルトの詩歌は新たな発展を遂げたのである²¹。

ウェールズの役割はまた末尾でも強調されていた。15年版がブルターニュの文学者への呼びかけで終わっていることはすでに見たが、新版はそれで終わらず、さらに次のような文章が付け加えられていた。

彼らをその道へと促すために、ブルターニュの古代文学に関する博識なるラ・クローズ (La Croze) 氏の意見を引いて、このバルドの研究を閉じたいと思う。氏によれば、あらゆる騎士道物語の起源は、ブルターニュとウェールズ地方にある、とのことである。ウェールズ地方はわれらがブルターニュの揺籃の場なのだ。(……) もし私の健康が許すなら、さらに話を広げて、博学なるユエ (Huet) 氏の論考『小説の起源』(*Origine des Romans*) にかなり面白い補遺を提供することができるだろう²²。

²⁰ D. Laurent, *Aux sources du Barzaz-Breiz*, ArMen, 1989, p. 318.

²¹ G. de La Rue, *Essais historiques sur les bardes, les jongleurs, et les trouvères normands et anglo-normands*, t.1, pp. 3-4.

²² *Ibid.*, p.99.

ラ・リュ神父はここで言及された仕事を果たすことなく、翌1835年に世を去る。しかし生前の神父から届いた書簡は、『バルザス＝ブレイス』を構想中のラ・ヴィルマルケの背中を大きく押したに違いない。彼はラ・リュ神父が亡くなった年から、それまで自由聴講生であった古文書学校に正規学生として登録する一方で、ブレイス語研究者ル・ゴニーデックに師事してブレイス語研究にも取り組み始める。そして、このル・ゴニーデックとの交流を通して、ラ・ヴィルマルケは思いがけず、ラ・リュ神父がその重要性を強調したウェールズの地を踏むことになる。

ラ・ヴィルマルケのウェールズ訪問

在野のブレイス語研究者として、『ケルト＝ブレイス語辞典』や新約聖書の翻訳によってその名を知られたジャン＝フランソワ・ル・ゴニーデック (Jean-François Le Gonidec) が、地方での官吏の生活を捨ててパリに出るのは1833年、58歳のときだった。彼はほどなくパリのブルトン人サークルの中心的な存在となり、その周囲には多くの青年が集うようになる。ラ・ヴィルマルケは、そのとりわけ熱心な一人だった。

ここで、『バルザス＝ブレイス』の出版以前のラ・ヴィルマルケの執筆活動を一瞥しよう。最初の大きな成果は、「歴史研究院」(Institut Historique) が1835年11月から12月にかけて開催した「ヨーロッパ歴史学会」における「ケルト語とケルト文学はフランス語とフランス文学の形成にいかなる役割を果たしたか」と題した報告である。翌年刊行の学会報告書に37ページにわたって掲載されたこの発表は、ガリアのバルドの伝承がブルターニュでレーになり、さらに騎士道物語の話材になる過程を辿っているが、それがラ・リュ神父の議論を下敷きにしていることは明らかだろう。とくに『列王史』の原本となったブレイス語の写本『ブリット』(*Bruty-Breninet*²³)については、ラ・リュ神父の『研究』以上に詳細に触れられており、このエピソードは以後のラ・ヴィルマルケのさまざまな論考で形を変えながら繰り返されことになる。

その後、ラ・ヴィルマルケの活動の中心となったのは、1833年に創刊された正当王朝派の雑誌『エコー・ド・ラ・ジュヌ・フランス』(*L'Echo de la Jeune France*) であった。1835年4月から1837年10月まで、彼がこの雑誌に寄稿した回数は13回に上ったが、ここで注目したいのは、1836年3月15日に掲載された「バルディズムの名残」(*Un Débris du Bardisme*) と、同年7月から翌1837年7月まで3回に分けて連載された「中世フランスの詩人＝物語作家」(*Poètes-romanciers de la France au moyen-âge*) である。前者は、ケルト民族が没落した後も、兄弟民族であるアルモリカ人とカンブリア人のみはその名残を保存したとして、一例として『バルザス＝ブレイス』にも掲載される民謡「エリアンのペスト」(*La Peste d'Elliant*) を紹介していた。後者は、中世騎士道文学を主題としながら、その源泉として考えられるものとして、ブルトン人の歌とフランス語の伝承と古代の記憶の三つを挙げる。著者はその説明をまずガリアのバルドから始め、続けて『ブリット』(*Bruty-Breninet*) とは750年にブルターニュの修道院で編纂された年代記であると語り、それがジェフリーの手に渡ってラテン語の『列王史』になり、さらにワースの手に渡ってフランス語に訳されて『ブリュ物語』(*Roman de Brut*) になったのだ、と語っていた。

²³ これは*Bruty-Breninet*の誤りであろうと思われるが、原著の表記に従った。

一方、このラ・ヴィルマルケの旺盛な活動とは裏腹に、師のル・ゴニーデックの健康は衰えていった。それが死病であることを理解していた彼は、「カムレイギディオ・ア・ヴェンニ協会（アベルガヴニ・ウェールズ歴史伝統文化保存協会）」（Cymreigyddion y Fenni）のトマス・プライス（Thomas Price）師に、自らの後継者としてラ・ヴィルマルケと詩人のブリズー（Brizeux）を紹介した。プライス師はアイステズヴォッドなどのウェールズ伝統文化復興の立役者の一人で、ケルト諸地域全体への関心からブルターニュにも興味を持ち、自らブレイス語を学んで、1829年にはブルターニュも旅していた。ル・ゴニーデックとは彼の『新約聖書』のブレイス語訳がきっかけとなって知り合ったのである。1837年3月か4月初旬、ラ・ヴィルマルケはこの一面識もないウェールズ人に初めて手紙を送る。

彼はそこでウェールズの伝承がヨーロッパの他の民族に与えた影響の問題を論じる計画を持っていること、またアルモリカのバルドの歌を集めていて、今年中に出版する予定であり、ウェールズに関しても同様の仕事をしたいという希望を述べてからこう書く。

私がああ聖なるカンブリアの地であなたにお会いできたら、どんなに素晴らしいでしょう。そう、私はしばしばそのことを夢み、そこでわれらが愛しきブルターニュと同じ習俗や伝統を見出すのを想像しています。（……）ウェールズ語は特にどの辺で使われているのでしょうか。アルモリカのブレイス語のように方言があるのですか。いまでもウェールズ語で伝えられているメルラン（Merdhyn）、メルラン＝エムリス（Merdhin-emrys）、タリエシン（Taliesin）、アネイリン（Aneurin）、スラワルフ・ヘン（Llywarc'hen）の歌はあるのでしょうか。アーサー王とその騎士たち、円卓、聖グラールの詩歌はあるのでしょうか。それとも私たちのところと同じように、ただ人々の記憶の中に存在するだけでしょうか。（……）またお国で綿密な調査をすれば、このアルモリカと同様に、これまで見つかっているこの種の歌や口頭伝承以外のものを採集することができるでしょうか²⁴。

文面から判断する限り、ラ・ヴィルマルケはウェールズの現状に関してほとんど何も知らない。それまで彼が発表した論文で言及し、『バルザス＝ブレイス』でも大いに引用することになるウェールズのバルドの歌についても、この時点ではほとんど知識を持っていないようだ。しかしこの手紙は、ラ・ヴィルマルケのウェールズに対する並々ならぬ関心と強い好奇心を確実に伝えていた。

プライス師はこの手紙に長文の返信を送り、その質問に逐一丁寧に答える。いわく、ウェールズ語はいまも大いに使用されており、この言語による定期刊行物が15もある。ウェールズ語には幾つかの方言があるが、それは言語系統の相違ではなく地域差による。バルドの作品に関しては、『マヴィルのウェールズ考古学』（*The Mavyrian Archaiology of Wales*）が参考になろう。彼らの作品ではアネイリンとスラワルフ・ヘンのものが素晴らしく、後世の改竄を免れているが、タリエシンやメルラン（Merddin）の作品は、その予言的性質のせいで手を加えられ、現在残っている作品の年代は12、13世紀より先には遡らない。アーサーとその円卓の騎士については、ウェールズの伝承はブルターニュへの移住の影響を受け、騎士道に関する部分は多くブルターニュに負っているはずだ。ウエー

²⁴ Fañch Postic, « La Villemarqué et le Pays de Galles (1837-1838) : deux lettres inédites de Thomas Price », *TRIADÉ, Galles, Écosse, Irlande*, 1995, p. 19.

ルズには14、15世紀の物語に類するものはないが、詩歌や三題歌には円卓の騎士の名前が見つかる。アーサー王伝承との関係では『マビノギオン』(Mabinogion)が興味深い、云々²⁵。

二人はその後何度か書簡を交わしたというが、残念なことにいまでは失われている²⁶。もっとも、このラ・ヴィルマルケの姿勢はプライス師に好印象を与えたに違いない。その証拠に、彼は同年10月にル・ゴニーデック、ブリズー、ラ・ヴィルマルケの3人を「ウェールズ伝統保存協会」の名誉会員として迎え、さらに翌1838年10月にアベルガヴニ(Abergavenny)で開催予定のウェールズの国民的祭典アイステズヴォッドにブルターニュからの代表団を招聘したいと申し出るのである。

1838年9月末、ラ・ヴィルマルケを一員とする総勢5名の代表団は、フランス政府の派遣使節としてウェールズを訪れる。出発前に、公教育大臣からウェールズ語とウェールズ文学の研究のための助成金を得ていたラ・ヴィルマルケのブリテン島の旅は5ヶ月に及んだ²⁷。

帰国後、彼は1839年5月10日付で公教育大臣にウェールズにおける調査の報告書を提出する。その内容は、すでに触れた「歴史研究院」の会議における報告や『エコー・ド・ラ・ジュース・フランス』の論考のそれとは大きく趣を異にしていた。ラ・ヴィルマルケはこう始める。

ケルトを起源とするあらゆる民族のなかで、ウェールズ人は疑いもなく最も開明的な民族である。ヨーロッパの他の諸民族がようやく野蛮状態を脱したときに、すでに彼らのうちには言語と文学が、歴史家や立法家や哲学者が、そして時代のあらゆる学問を体現するバルドがいたのである²⁸。

ラ・ヴィルマルケは報告書を、6世紀初めから7世紀半ばまで活躍したウェールズのバルド、すなわちタリエシン、メルラン(Merzlin)、アネイリン、そしてスラワルフ・ヘン(Lywar-hen)の紹介から始める。ただその名前を挙げるだけではない。かの地で『マヴィルのウェールズ考古学』を手に入れた彼は、バルドたちの詩句を引用しながら論じるのである。いわく、タリエシンはバルドと占い師とドルイドの長で、転生の教義を信じ、キリスト教の教義に反する諸教義を説きながら、他方で聖三位一体を讃え、その掟に従うよう命じた。この奇妙なドルイド教とキリスト教の混淆は、メルランの作品にもまた見られる。アネイリンは、タリエシンやメルランのように予言者ではなく、ただのバルドであったが、前二者よりもキリスト教的で異教の影すらない。続くスラワルフ・ヘンは、ウェールズの詩に新しい時代を開く。彼は老いを前に「私は若くて最高だった」と嘆息する。野蛮さのなかに、人間の心が息づき始めるのだ。ラ・ヴィルマルケは『バルザス＝ブレイス』でも頻繁に言及されるこのバルドに1ページを超えるスペースを割く。その紹介の後、報告者はこう付け加える。

²⁵ *Ibid.*, pp.20-23.

²⁶ *Ibid.*, p. 24.

²⁷ *Ibid.*, p.27. なお、ラ・ヴィルマルケは出発前にはほぼ完成した『バルザス＝ブレイス』の原稿を印刷所に預けている。原稿は1838年4月に「歴史委員会」で検討の対象になったが、出版助成は見送られた。ウェールズ滞在大おびその前後のラ・ヴィルマルケの詳細については、拙論「ブルターニュにおけるナショナリズムの誕生(四)」鹿児島大学法文学部紀要『人文科学論集』第57号(2003)を参照。

²⁸ *Rapport sur la littérature du pays de Galles adressé à M. le ministre de l'instruction publique*, Imprimerie de Paul Dupont et C^{ie}, 1839, p. 1.

私たちはそこにもうひとつの驚きの種を見つけた。つまり、タリエシンの言葉はまさにバス＝ブルターニュ地方の農民が現在話している言葉なのである。私たちが彼らにタリエシンの歌の断片を読んであげたところ彼らはそれを理解したが、ウェールズの学者たちはそれをなかなか理解できなかったのである。メルズリンの音律法はバス＝ブルターニュ地方の農民たちのそれである。また幾つかの韻律形式は、その時代まではスラワルフ＝ヘンや彼と同時代のウェールズのパルドに特有のものと思われていたが、同じものがわれわれのアルモリカの古い民謡にも見つかるのである²⁹。

ラ・ヴィルマルケは古のウェールズのパルドたちの言葉のなかに、バス＝ブルターニュの農民の言葉との共通性を見いだす。のみならず、彼はその事実をパルドたちの歌の古代性の証拠にしようとするのである。逆に言えば、ラ・ヴィルマルケがウェールズ旅行から得たのは、自らその民謡を採集したバス＝ブルターニュの農民の言語が古代に遡るという確信にほかならなかった。

続けて報告者は、ウェールズのパルドの伝統の変質に触れる。かつて複雑な規則と巧妙なリズムに則って歌われたその韻文の歌は、時とともに放浪の詩人によって散文で語られるただの民話になった。そして今日に残る中世のさまざまな作品は、その民話からつくられたのである。

これらの作品のうちの幾つかは、フランスの騎士道詩歌、特に円卓ものに関する不明瞭な点を解明してくれるようなものもある。なかでも以下の作品を挙げよう。『ブリット』 (*L'Histoire vulgaire des Princes*)、『泉の貴婦人』 (*La Comtesse de la Fontaine*)、『エルビンの息子、ゲライント』 (*Gérait fils d'Erbin*)、『ペレドゥルあるいは聖杯』 (*Peredur ou le Greal*) である。

『ブリット』はアルモリカからもたらされた後、ウェールズ地方の言語に訳され、それからあるグラモーガンの僧に伝えられて、この僧が1125年頃にそれをラテン語に翻訳したのである。この書物に書かれている主な出来事は、長く民衆の記憶に刻まれていたもので、彼らは民衆詩人の口からそれを聴いたり、あるいは自分たち自身で繰り返して語ったりすることで喜びを見出していた³⁰。

ラ・ヴィルマルケはここで、すでにラ・リュ神父が指摘していた『列王史』のブルターニュ起源説を踏襲するばかりか³¹、それぞれがクレチアンの『エレックとエニード』、『獅子の騎士』、『ペルスヴァル』に対応する『マビノギオン』の三つの説話にも触れ、それもまたブルターニュ起源であると強調して、こう書く。

ある著作家が証拠を挙げるでもなく言い、他の人たちがその後繰り返すには、ブルターニュの支配者であるヘンリー2世が、イングランドにブレイス語で書かれた幾つかの写本を運ばせて、命令によってそれをフランス語に訳させたものが、円卓物語の起源になったということである。この主張を受け入れるか拒否するかはともかく、私たちは注目すべき事実をひとつ指摘しよう。それは先に述べたウェールズの三つの民話が、明らかにグラモーガン方言で書かれているにもかかわらず、同時代の他

²⁹ *Ibid.*, pp. 4-5.

³⁰ *Ibid.*, pp. 6-7.

³¹ 『列王史』の原本に関しては、この報告書にはこう書かれている。「私たちはアルモリカ起源のブレイス語の写本を発見することはできなかった」 (*Ibid.*, p.7)。

の作品の言語とは異なり、アルモリカのブレイス語に特有の表現、その固有の慣用語法、いまもバス＝ブルターニュの農民たちの間に残る風俗慣習に満ちており、おそらくこの驚くべき一致は単なる言語と起源の類似に帰してはならず、先述した著作家たちとともに、これらの民話も『ブリタニア列王史』と同様、アルモリカからもたらされてウェールズ語に訳されたと考えるべきなのであろう³²。

すでに文献によってブルターニュ起源が示唆されていた作品について、ラ・ヴィルマルケはウェールズ語とブレイス語の類似を実地で経験することによって、それが正しいという確信を強めていく。そこで花開いたブレイス語の失われた作品は、同じ言語を共有していたがゆえに、海を越えてウェールズに伝えられ、その土地の言語で生きながらえたのである。

ラ・ヴィルマルケは、アベルガヴニのアイステズヴォッドで、自分がブレイス語の歌を歌ったとき、1300年ぶりにその言葉を耳にした聴衆が、それを理解できるのに気づき、総立ちになって熱狂したというエピソードを紹介して、この報告書を閉じる。

円卓物語の復活とその起源

中世文学はロマン主義によって再発見されたという定説がある。しかしこれは必ずしも正しくはない。少なくともフランスでは、その発見は18世紀半ばに遡る。そしてグウェンフランにまつわる議論の背景を理解するためには、この円卓物語の復活について簡単に触れておくことが不可欠である。

この時代に最初に中世文学に関心を持った人の一人とされるのは、文献学者で歴史家のジャン＝バプティスト・ド・ラ・キュルヌ・ド・サント＝パレー (Jean-Baptiste de La Curne de Sainte-Palaye) である。きっかけは、古フランス語の難解語彙集の作成のために、クレチアン・ド・トロワの作品の抜粋を始めたことであったが、その作業のかたわらに書き留めた覚書を1753年に『古の騎士道に関する覚書』(*Mémoires sur l'ancienne chevalerie*) として出版すると、大変な評判となった。

1775年、このサント＝パレーが中心になって、『ビブリオテーク・ユニヴェルセル・デ・ロマン』(*Bibliothèque Universelle des Romans*) という小説叢書が創刊される。この叢書が目指したのは、あらゆる小説を、そのエッセンスだけを抽出すべく、短くリライトした形で読者に提供することであった³³。いうなれば、小説の百科事典である。この叢書は大革命が始まる年まで毎年16巻ずつ、計224巻刊行された。

この『ビブリオテーク・ユニヴェルセル・デ・ロマン』で中世騎士物語の執筆を担当したのが、トレサン伯 (Comte de Tressan) であった。1775年にトマス・マロリー (Thomas Malory) の『アーサーの死』(*Le Morte d'Arthur*)、1776年には『ブルターニュのアルテュス』(*Artus de la Bretagne*)、1777年にはクレチアンの『エレックとエニード』(*Erec et Enide*)、『クリジェス』(*Cligès*)、『イヴァン』(*Yvain*) と発表されたトレサン伯の仕事は、忘れられた中世騎士物語をフランスの読者に広く知らしめることになった。

1811年、この『ビブリオテーク・ユニヴェルセル・デ・ロマン』の愛読者であったクルゼ・ド・

³² *Ibid.*, p. 8.

³³ 叢書の編集者のポルミー侯 (Marquis de Paulmy) はこのリライトの形式を *miniature* と呼んでいた。

レセ (Creusé de Lesser) が、アーサー王物語を5万行の韻文にまとめて『円卓』 (*La Table ronde*) を出版し、大きな成功を収める。著者のクルゼは革命期から政治畑を歩き、帝政期にナポレオンの不興を買って文学の道に入った人であった。彼はこの書物の冒頭に自ら31ページにわたる「序言」を付し、騎士道の起源にはアラブやアジア、あるいはムーア人やスペインのキリスト教徒など諸説があるが、自分は古代の北方民族に源泉があると思うと語り、次のように書いた。

しかし幾人かは、『ランスロー』と『メリアデウス』 (*Méliadus*) と、わけても『トリスタン』の物語の起源はブルターニュに、とどのつまりはフランスにあると主張できると考えている。(……) この学者たちは、これらの物語が実際にイギリスから伝わったことは認めるものの、それがイギリスに伝わったのはブルターニュからで、この土地は文明化される以前にはフランスのどこよりもイギリスと関係が深く、しかもこの土地は円卓や聖杯やメルランに関するイギリス的観念をこれら物語のなかに取り入れさせたのだ。彼らはその観念の幾つかはブルターニュで生まれたとさえ考えている。彼らはその度に、あらゆる円卓物語の父である『ブリット』 (*Brut*) の物語は、ジェフリー・オブ・モンマスによってバス＝ブルターニュ語から訳されたと繰り返す³⁴。

フランスで円卓物語が人口に膾炙するうえで大きな貢献のあったクルゼが、この時点ではっきりと円卓物語の北方起源説を支持していたことは注目に値しよう。とはいえパリジャンのクルゼは、その起源を郷土愛や愛国心にはつなげない。代わりに彼は、「円卓物語は仏英の共有物³⁵」として捉えてこう言う。

文芸の共和国はつねに友好的である。何世紀にもわたって競い合い、また評価し合ってきた両国民の共通の創作物、分かちがたい所有物である一個の作品を練り直し、仕上げるという仕事は、なかなか楽しいことであった。思うに、これこそ両国民が一緒になってできる唯一の仕事だろう。私にはこの詩が、これら英仏の諸観念の集合から何かしらの魅力を引き出せるようにと思えた。もしかしたら、この二つの民族はその冒険を分かち合うこともあるかもしれない。かつてその創作を分かち合ったように³⁶。

もっとも、19世紀前半において、クルゼのように考える人は多数派ではなかった。当時学界で有力だったのは、円卓物語の起源は「南仏」にあるとする見方だったのである。この南仏起源説の中心人物は、プロヴァンス人のフランソワ・レヌアール (François Raynouard) だった。1816年から1821年にかけて6巻に及ぶ『トルバドゥール詩選』 (*Choix des poésies originales des troubadours*) を刊行した彼は、プロヴァンス語こそ、あらゆるロマンス語の共通の祖先であり、円卓物語の起源もプロヴァンス文学にあると考え、それはまたアウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲル (August Wilhelm Schlegel) をはじめとする有力な学者たちの賛同を得ていた。この南仏起源説に従えば、

³⁴ Creusé de Lesser, *La Table ronde*, Delaunay, 1812, p. xviii.

³⁵ *Ibid.*, p. xix.

³⁶ *Ibid.*

北方のトルヴェールは南仏のトルバドゥールの模倣者であるか、せいぜいがその翻訳者にすぎなかったのである。

たとえば、南仏派の一人で、ソルボンヌ大学における文学講義によって人気を博したクロード・フォリエル (Claude Fauriel) は、1832年に行った中世騎士道叙事詩に関する連続講義で、ラ・リュ神父らが支持する円卓物語のプルターニュ起源説に言及し、こう一蹴した。

従来しばしばアルモリカのプルターニュが、騎士道物語一般、とりわけ円卓物語の基礎を与えてきたと指摘されてきた。これまで誰一人として、この主張に有利なわずかな事実はもちろん、ほんの少しのきっかけすら提供してこなかった以上、私はこの主張に反論するつもりはない。中世において、さらに近代になっても、アルモリカのブルトン人の詩的・社会的文化に関して知られるわずかな事柄のうちに、円卓の叙事的物語のような作品の萌芽がプルターニュに存在し得たことを証明できる特徴は何ひとつない。私はまったく根拠のない主張を議論する気はない。現在の歴史批判の状況では、そのような議論はそれで終わりであるし、蒸し返す必要もない³⁷。

フォリエルは、文献の残るウェールズに関しては慎重な検討に値するとするが、三題詩や年代記の執筆年代を推測すると、それらは円卓物語の起源ではなく、むしろその伝播の結果であるとして、ウェールズの円卓物語関連の文献の起源は、ジェフリーの『列王史』も含めて、すべてプロヴァンスにあると結論し、ケルト起源を認めなかった。

しかしながら、北方起源説は少しずつその支持者を広げていった。たとえば、ジャン＝バチスト＝ボナヴェンテューラ・ド・ロクフォール (Jean-Baptiste-Bonaventure de Roquefort) は、1808年に出版した『ロマンス語難解語彙集』 (*Glossaire de la langue romane*) において、ブレイス語を「カンベルコランタンの方言³⁸」と呼び、この言語を起源の言語と考える人々の幻想を嗤ったが、1809年にはケルトアカデミーの会員となり、1813年にアカデミー・フランセーズに提出された論文『12世紀と13世紀のフランス詩の状況について』 (*De l'état de la poésie française dans les XII^e et XIII^e siècles*) において、フランス文学の成立において南仏の影響は実際には言われるほど大きなものではないとして、北方からの影響の重要性を強調した。ロクフォールはまた、ラ・リュ神父が滞英中に筆写したマリー・ド・フランスのテキストを譲り受けて、1820年に『マリー・ド・フランスの詩』 (*Poésies de Marie de France*) を刊行し、それを神父に捧げたのである。

1835年に出版された『フランス文学史』 (*Histoire littéraire de la France*) 第18巻は、レヌアールとラ・リュ神父の学説を対等に紹介し、二人を反論できない根拠に基づきながら、同様の才能と熱意をもって、プロヴァンスとノルマンディーというそれぞれの土地の栄光のために戦う「二人の闘技者³⁹」と呼んだ。その一方で、トルヴェールの膨大な作品は、イギリスやドイツなどの海外の図書館にも多く所蔵されており、その踏査にはなお時間がかかるとして、論争の行方が未知の文献の発掘に左右される可能性も示唆していた。

³⁷ Claude Fauriel, *De l'origine de l'épopée chevaleresque du moyen âge*, A. Auffray, 1832., pp. 65-66.

³⁸ Jean-Baptiste-Bonaventure de Roquefort, *Glossaire de la langue romane*, t. 1, B. Warrée oncle, 1808, p. v.

³⁹ *Histoire littéraire de la France*, t. 18, 1835, Kraus reprint, 1971, p. 702.

翌1836年、すでに引いた「ガリア人その他のケルト諸民族におけるバルド」がアンペールによって発表される。彼はフォリエルの後継者で南仏支持者と見なされていたが、この論考ではフォリエルの主張の正当性を確認しつつも、北方起源の可能性にも含みを持たせて、こう書いていた。

もしガリアのどこかに、バルドたちが、しかもドルイドの伝統を持つバルドたちがなお存在したとしたら、それはアルモリカを措いて他にはあり得なかった。この地方は、ローマ人に完全に征服されず、蛮族に征服された後、数世紀にわたって独立国であり続け、フランスに併合されたにもかかわらず、風貌や衣装や言語を今日までケルト的かつガリア的なものを残したのである⁴⁰。

ブルターニュの地で、ガリアのバルドに関する何らかの痕跡が発見されること。それが、この南と北の論争において、北の支持者が待望する最も理に適った結末だったのである。ラ・ヴィルマルケが上のアンペールの一節を「序文」の冒頭に掲げて、「グウェンフランの歌」が収録された『バルザス＝ブレイス』を出版するのは、この3年後のことである。

(つづく)

付記 本稿は平成27年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C））による研究「19世紀フランスの文化事象としてのブルターニュの民謡収集」の成果の一部である。

⁴⁰ J.-J. Ampère, *op.cit.*, p. 442.

